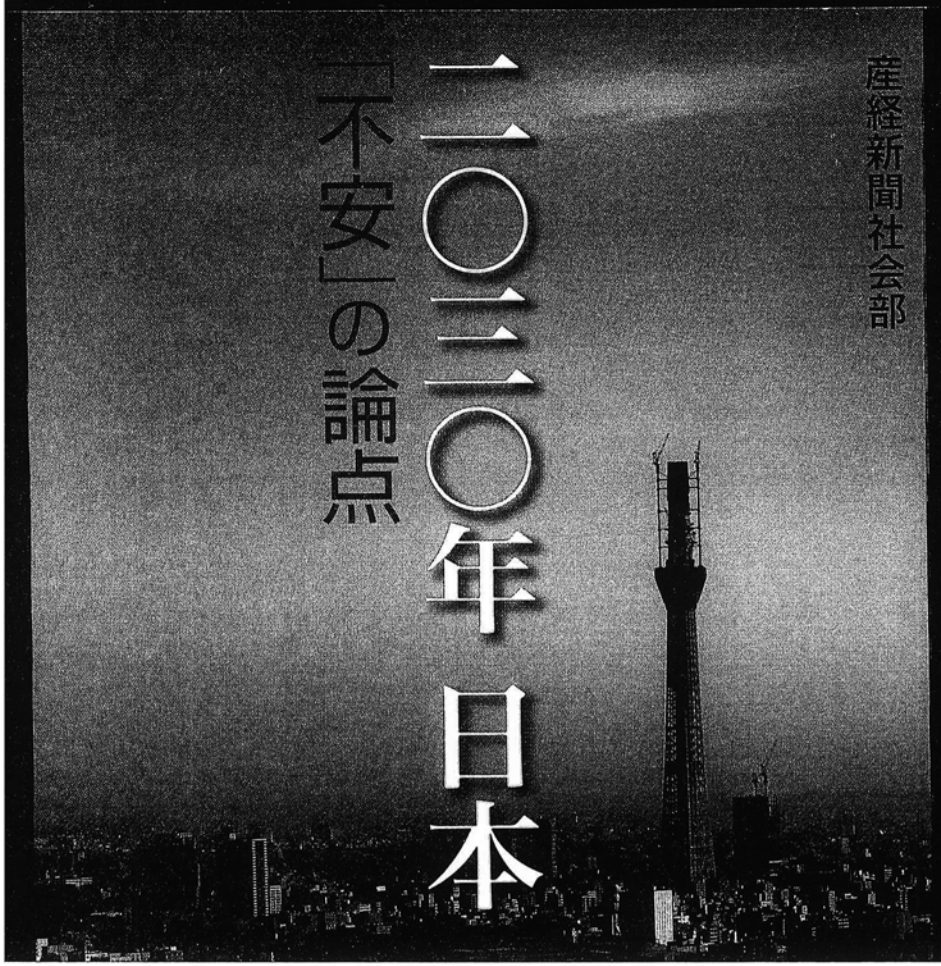

二〇三〇年 日本

「不安」の論点

産経新聞社会部

二〇三〇年 日本

ISBN978-4-8191-1120-1
C0095 ¥1500E

9784819111201

1920095015002

発行：産経新聞出版

定価：[本体1,500円+税]

絶望か

「あなたの20年後を想像してください」

希望か

- 働く場所はありますか
- ふるさとはありますか
- 親を超えられますか
- 都市はもちますか
- 日本はありますか

産経新聞社会部

産経新聞出版

本書は、ちまたにあふれる楽観的、悲観的な「未来予測本」「未来警告本」ではない。未来を選び取るための手がかりとして、現代のまなざしから「2030年」を考える試みの書である。そのために、われわれは次のような質問を全国のさまざまな立場の人々へ問いかけた。

「あなたの20年後を想像してみてください」

（まえがきより）

神奈川県鎌倉市の人工関節専門病院に勤める整形外科医、塚本理一郎さん（35）は東京都内の医者一族の3代目である。

祖父は宮内庁病院の勤務医、祖母は耳鼻科の開業医、母親（67）は耳鼻科医。父親も整形外科の開業医だったが36歳で急逝した。母親はその後、整形外科へ転向し夫の医院を30年間、1人で守ってきた。

塚本さんは「祖父は国に生きた医師でした。祖母は亡くなる2年前の92歳まで診察していたという鉄人のような町の医師。父は海外から最新の医学を日本へ伝え、母は父亡き後に孤軍奮闘してきた。それぞれに私利私欲なく、働き者で、『医は仁術』を実践した医師たちでした」。

塚本さんもまた、幼いころは医師でなくパイロットになりたかったというが、4人の生き方を見て結局、同じ道を選んだという。

母親が院長を務める世田谷の整形外科医院は、毎朝8時から夜7時まで開いており、患者が絶えない。診療前と昼休み、診療後には、通院できない患者のため自転車をこいで往診にも出かける。休診は祝日しかない。

警官と医師。職業こそ違えど、彼らが全人生をかけて次世代へと伝えているのは、実は同じものだ。それは官であれ民であれ、他の公的な職業も同様だろうし、そもそも職業とは多かれ少なかれ公的な側面を持つ以上、あらゆる人々が伝えていることなのかもしれない。

20年後、親を超えられますか。3代目医師の塚本さんはこう答えた。

「超えないまでも、せめて肩を並べるまでにはなっていたい。そして『医は仁術』の系譜をしっかりと受け継いでいたい」

ノブレス・オブリージュなき日本

自衛隊史上初の海外派遣となった1991（平成3）年の「ペルシャ湾掃海派遣部隊」で指揮官を務めた海上自衛隊の元海将補、落合畯さん（70）。父親は45（昭和20）年、太平洋戦争の沖縄戦で海軍の沖縄方面根拠地隊司令官を務め、地下司令部壕で自決した大田實少将（死後、中将）である。

大田少将は自決直前、「沖縄県民かく戦へり　県民に対し後世特別の御高配を賜らんことを」で結ばれる電報を本土へ打ったことで知られ、旧日本軍への反感が強かった戦後の沖縄でも人々から愛された。落合さんは三男で、父親が自決した時は5歳だった。

「親父が身をもって教えてくれたのは、海軍伝統の『指揮官先頭』の精神だった。指揮官は常に、生命の危険を冒してでも先頭に立つ。ペルシャ湾へ向かう船の中で、親父を見習おう